

【原 著】

保育教諭の保育観に関する研究動向と課題  
—幼稚園教諭・保育所保育士としての保育経験の違いに着目して—

蓮井 和也 中平 絢子 高橋 敏之 片山 美香

Research Trends and Issues Concerning Childcare Teachers' Views on Childcare  
With a Focus on Differences in Childcare Experiences as Kindergarten Teachers and Nursery Teachers

HASUI Kazuya, NAKAHIRA Ayako, TAKAHASHI Toshiyuki, KATAYAMA Mika

2022

岡山大学教師教育開発センター紀要 第12号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education  
and Development, Okayama University, Vol.12, March 2022

## 保育教諭の保育観に関する研究動向と課題

—幼稚園教諭・保育所保育士としての保育経験の違いに着目して—

蓮井 和也※1 中平 絢子※1 高橋 敏之※2 片山 美香※2

『子ども・子育て支援法』改正以降, 認定こども園は大幅に増加し, それに伴い様々な保育経験(幼稚園教諭・保育所保育士)をもった保育教諭が同じ園で勤務する状況も増えている。そこで本論では, 保育教諭の保育経験の違いに着目し, 保育観に関する研究動向と課題について考察した。先行研究を内容ごとに分類して概観すると, 幼稚園教諭は教育的要素を, 保育所保育士は養護的要素をもつ保育観をそれぞれに重視する傾向が示唆された。しかし, 保育経験の違いがどのような保育内容や保育場面において保育観の相違をもたらすかについて十分な検討がされていないことが明らかになった。保育観の共有が保育の質の向上に繋がることから, 保育経験による保育教諭の保育観の詳細な相違点を明らかにすることが今後の課題である。

キーワード: 認定こども園, 保育教諭, 保育観, 相違, 保育経験

※1 岡山市興除認定こども園

※2 岡山大学学術研究院教育学域

### I 保育教諭の保育観に関する研究の問題と目的

本研究は, 認定こども園に勤務する保育教諭がそれ以前の幼稚園教諭または保育所保育士(以下, 保育士)としての保育経験を踏まえながら円滑に協働していくための方途を明らかにする研究の端緒と位置付ける。本論では, 設置主体や目的の異なる保育施設での保育経験をもとに形成される保育観に着目して国内の先行研究を概観し, 異なる保育施設での保育経験をもとに形成される保育観の特徴及び相違点を明らかにすることを第1の目的とする。さらに, 異なる保育施設での保育経験をもつ保育者が, 保育教諭として保育観を共有する際の課題を提示することを第2の目的とする。

内閣府(2021)の報告によると, 『子ども・子育て支援法』が改正された2012(平成24)年度全国に909園あった認定こども園が, 2021(令和3)年度においては8505園と大幅に増加している。また, 2020(令和2)年度と2021(令和3)年度の認定こども園数を比較して見ると, 1年間の増加数は569園であり, その内, 幼稚園から移行した園が206か所, 認可保育所から移行した園が369か所, その他の保育施設から移行した園が16か所, 新規開園した園が47か所となっている(複数の施設が合併して1つの認定こども園になった場合等があるため, 移行数と増加数は一致しない)<sup>(1)</sup>。これらのデー

タからは、認定こども園は増加傾向にあり今後も増加していくことが予想されること、新しく認定こども園として開園する園より幼稚園や認可保育所等と既にある保育施設が認定こども園に移行することが多いことが読み取れる。移行する認定こども園の増加に伴い、保育経験が認定こども園に限られる保育教諭が現れてきてはいるものの、保育教諭としての勤務以前に幼稚園教諭または保育士として勤務していた保育者が認定こども園に異動し、保育教諭として協働する現状も増えていることが言える。はたして設置主体や目的の異なる保育施設での保育経験をもった保育者は保育教諭として、相互に保育観を共有しながら齟齬なく保育を実践することが出来るのであろうか。

認定こども園において、様々な保育経験をもつ保育教諭が協働することによる課題として、保育教諭の保育観に相違が生まれ、保育に対する考え方に食い違いが起こることが予想される。松本（2019）は、1989年以降、『幼稚園教育要領』及び『保育所保育指針』が社会や環境の変化を踏まえて約10年おきに告示及び施行されるようになったことが保育者の保育観やその形成過程に影響を及ぼしているのではないかとの観点から、1989年以降2018年までの30年間の保育観に関する研究論文31編を取り上げ、保育観の定義を試みている。その結果、価値観、知識、信念が保育における保育観に相当するとの考えを示した。価値観は保育者の生育環境または生まれながらの性格から形成され、知識は保育者自身が過去に受けてきた教育や実習先での保育経験・指導、勤務園での保育実践・園内研修等から形成され、これらの価値観と知識が信念を作り、保育者の保育観の基となっていると言う。また、それらの価値観や知識は保育者によって様々であるとも述べている<sup>(2)</sup>。保育者の生育環境や性格から形成された価値観が基となる保育観の相違は、幼稚園・保育所・認定こども園という保育施設の種類を問わず、いずれにおいても見られる相違点である。一方、様々な保育経験をもつ保育教諭が協働する認定こども園では、生育環境や性格から形成される保育観の相違だけでなく、異動前の保育施設で形成される保育経験による保育観の相違が認められ、協働における困難が懸念される。そのため、認定こども園で勤務するようになると自身の保育観を変化させているとの指摘がある（藤木ら、2011）<sup>(3)</sup>。

藤木ら（2011）は、認定こども園で働くようになった保育者が幼稚園教諭や保育士として働いてきた経験をもつ場合、それぞれの保育スタイルを認定こども園の機能に対応したものへと変化させる必要があるとし、子どもや保護者のニーズの変化に合わせた保育スタイルの調整に伴い、保育観も変化することを指摘している<sup>(4)</sup>。保育者は今までの保育経験によって形成した自身の保育スタイルや保育観を、認定こども園に合ったものに調整していく必要性を感じ、意識的に変化させていると推察される。しかし、認定こども園において保育教諭は自身の保育観をどのように調整していけばよいか分からず苦勞している実態が課題として見られた（西川、2013）<sup>(5)</sup>。

保育教諭が形成していく保育観の1つの指針となるのが、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』である。2017（平成29）年の『幼保連携型認定こ

ども園教育・保育要領』の改訂においては、「幼保連携型認定こども園の教育及び保育において育みたい資質・能力を明確にしたこと」「5歳児修了時まで育ててほしい具体的な姿である「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を明確にしたこと」<sup>(6)</sup>等といった、『幼稚園教育要領』と『保育所保育指針』の内容に整合性を図った改訂がされ、幼稚園・保育所・認定こども園における共通の教育及び保育の指針が示されるようになった。それに加え、幼保連携型認定こども園の教育と保育が一体的に行われることを教育・保育要領の全体を通して明示したことや、幼保連携型認定こども園において特に配慮すべき事項として満3歳以上の園児の入園時や移行時について、多様な経験を有する園児の学び合いについて、長期的な休業中やその後の教育および保育について、明示したこと等、認定こども園で独自に配慮すべき事項について記述されている。幼稚園教諭・保育士にはない、保育教諭に形成される特徴的な保育観があると考えられる。しかしながら、保育教諭の保育観の独自性に焦点を当てた先行研究はほとんど認められず、保育教諭独自の保育観について十分明らかになっているとは言えない。

そこで、本論では、保育教諭が円滑に保育実践を行う上で欠かせない保育観の共有における課題を提示するために、まずは保育観の定義を行う。続いて、先行研究を概観し、幼稚園教諭、保育士、保育教諭それぞれの保育観の特徴を整理して示し、最後に異なる保育施設での保育経験をもつ保育者が、保育教諭として保育観を共有しながら円滑な協働を目指す際の課題を提示する。

## II 先行研究における保育施設ごとの保育観の特徴と定義

### 1 保育施設ごとの保育観に関わる先行研究の選出方法

保育施設別に、保育者（幼稚園教諭・保育士・保育教諭）がもつ保育経験によって形成される保育観の特徴を整理して示し、保育施設別に保育者がもつ保育観の相違点を明確化するため、電子ジャーナルデータベース CiNii を用いて「保育者」「保育教諭」「認定こども園」「保育観」のキーワードで検索した研究論文を通読し、保育施設別の保育観の特徴を整理すると共に、相違点に関する検討を行った。なお、対象とした研究論文では、教育・保育実習での保育経験しかもたない保育者養成校の学生を対象とした研究論文は含めないこととした。さらに、「幼稚園教諭」「幼稚園」「保育士」「保育所」というキーワードも含めて検索したところ、30編の主要な先行研究が選出された（「保育教諭の保育観」に関する論文が2編、「幼稚園教諭の保育観」に関する論文が14編、「保育士の保育観」に関する論文が6編、「幼稚園教諭の保育観」「保育士の保育観」のどちらも論述された論文が8編）。また、幼稚園教諭が獲得・形成する指導信念の背景には、自身がもつ保育観が常に意識されている（中井・松良、2005）<sup>(7)</sup>ことから、「指導信念」「指導論」「指導観」のキーワードも保育観の一要素になると捉えて検索をした結果、19編の主要な先行研究が選出された（「保育教諭の指導観」に関する論文が0編、「幼稚園教諭の指導観」に関する論文が9編、「保育士の指導観」に関する論文が0編、「保育者（幼稚園

教諭・保育士)の指導観」に関する論文が10編)。以上の先行研究をもとに幼稚園教諭・保育士・保育教諭それぞれの保育観を整理した上で比較検討し、保育経験による保育観の相違点を導出する。

## 2 「保育観」の定義と視点の整理

本論の執筆に際し、まずは本論における「保育観」の定義を行う。

山本(2017)は幼児教育・保育の基本である『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』に触れ、これらの中に「保育観」という語句がいつさい用いられていないことを指摘している<sup>(8)</sup>。辞書「大辞林」から「観」のもつ意味を調べると「(接尾語に用いて)～に対する見方、考え方の意を表す」と記されている。ここに「保育観」の「保育」を当てはめると、「保育に対する見方、考え方」と示すことが出来よう。

松本(2019)は、保育者の保育観に関しては様々な角度から研究が行われているが、保育者の保育観の内実を見ると「保育観」の言葉の捉え方や定義が多岐に亘っていることを指摘している。「保育観」の意味を現職保育者に質問すると、ある保育者は「このように育てたいという保育に対する人それぞれの思いや保育に対してもっている考え、正しいと思っていること」と答え、「保育をする上で、どのような関わり、対応が良いのかと言った保育者の価値観、理念」「保育をする上で一番大切にしている根っこの部分、保育に対する感性、感覚と捉え、社会が変わるとともに保育観も変化する」等と多様であり、保育者は「保育観」という言葉を個々で様々な理解し保育に臨んでいることが分かる<sup>(9)</sup>。これらより、保育観は広義には「保育の見方、考え方」として捉えることができるが、保育の実践者である保育者がもつ保育観の捉え方は子どもへの願いや発達観、保育への信念・理念等、保育者ごとに様々な細かな捉え方をしていることが示されている。つまり、保育者によって抱いている保育観に違いがあり、保育観として捉える内容自体も一貫していないことが分かる。

松本(2019)は、保育者の保育観に関する先行研究を整理し、(1)保育における見方・考え方と定義(2)保育における見方・考え方と定義した上で、保育観は変化するものとの捉え方(3)保育観を保育者の信念・理念とし普遍的な変わらないものであるとの捉え方(4)保育者の保育観を子どもの認識観、発達観、指導観、保育内容観、保育者の人生観等と保育に含まれる概念形態の総称との捉え方の4つの観点から保育観を定義している<sup>(10)</sup>。先行研究には、保育観の意味を捉えているものもあれば、保育者の性格・人生・経験・学び等と様々な要因によって保育観が変化するもの、一方で普遍的で変化しないものとした捉え方等、保育観の捉え方には様々なことがあることが分かる。

浅井・浅井(2017)は、保育士の保育観を取り上げた研究において、保育観は保育者自身の性格や育ってきた環境、経験等で異なるものであり、新たに経験を重ね、自身の学びによっても変化していくものであるとしている<sup>(11)</sup>。保育の見方・考え方である保育観は保育者の経験や学びによって形成し変化していくものであることから、幼稚園・保育所等での保育経験も保育者の保育観

を形成する1つの要因になると考える。また幼稚園・保育所での勤務から認定こども園での勤務に変わった際には、新たな経験を積み上げることとなり、保育観の変化が予測される。

以上のことから、本論では保育者の保育経験に着目しながら保育観の相違について論述するにあたり、保育観を「広い意味での保育における見方・考え方」と定義した上で、保育観は変化するものとして捉える点を重視する。

### Ⅲ 異なる保育施設での保育経験によって形成される保育観の特徴

#### 1 先行研究における保育観の特徴の整理

保育者の保育観の特徴を明らかにするために対象とした論文の内、幼稚園教諭を対象とした論文が23編、保育士を対象とした論文が6編、保育教諭を対象とした論文が2編、幼稚園教諭と保育士を対象とした論文が18編であった。またこれらの内、保育施設ごとに保育観を比較検討したものが5編であった。それらの比較研究を見比べてみると研究の目的や保育観を比較する際のカテゴリ構成に違いが認められた。

梶田ら(1985)は、保育者の保育に対する信念とその構造について明らかにすることを目的として、幼稚園教諭と保育士の指導論に関する調査を行っている。なお、ここで指導論は指導に対する見方・考え方と定義され、指導も保育も幼児教育にそのまま直結するものと述べていることから、本論で定義する保育観と類似した概念と捉えた。51の対項目における評定結果を因子分析した結果、保育者の指導論の構造として、「教師中心—子ども中心」「成果重視—過程重視」「まとまり重視—個性尊重」「男女区別—男女平等」の4因子を抽出した<sup>(12)</sup>。また中(1996)は、梶田ら(1985)の指導論を問う項目作成した質問紙調査の回答を因子分析した結果、「子どもの興味・意欲重視—積極的な教師の働きかけ重視」「のびのび重視—しつけ・安全重視」等を含めた5因子を抽出した。さらに、抽出した5因子を構成する25の対項目について調査を行い、幼稚園教諭と保育士の保育観の特徴を明らかにした<sup>(13)</sup>。さらに藤木ら(2011)は、梶田ら(1985)の4因子から「男女区別—男女平等」を除いた3因子を構成する31の対項目について調査を行い、認定こども園に異動した幼稚園教諭と保育士の保育観の変化を明らかにした<sup>(14)</sup>。梶田ら(1985)の調査研究により抽出された4因子は保育実践における保育観の構造を捉えることに適した因子構成であると考えられた。

梶田ら(1985)を始めとした対概念による保育観の比較研究とは別に、保育観の内容を具体的に捉えて分類し、比較した研究が2編見られた。矢藤ら(2017)は、認定こども園への移行に伴う保育者の保育観にどのような変化が認められるかを明らかにすることを目的とし、保育教諭を対象に「子どもに対する見方・考え方」「養護や教育に対する見方・考え方」「未就園児の支援」「同僚との関わり」の4項目に関する検討を行った<sup>(15)</sup>。各項目の内容構成からは、複数の項目に同じキーワードが含まれるものが見られており、保育経験による保育観の相違点を具体的に捉えて見出すには不十分であると判断した。

小原ら（2013）は、異なる保育経験をもつ保育者が連携を強化していくための示唆を得ることを目的とし、幼稚園教諭と保育士を対象に、特に大切にしている保育観に関する自由記述を分析している。KJ法による分析を行った結果、保育観を構成する概念（カテゴリー）として「子どもへの理解」「発達の諸側面」「保育環境」「信頼関係・連携」の4つの大カテゴリーとそれらを構成する13の小カテゴリーを生成した<sup>(16)</sup>。藤木ら（2017）の保育観の分類項目と比べると、概念構成がより詳細で明確に整理されており、保育者の保育観の内実を具体的に捉えられていた。

梶田ら（1985）と小原ら（2013）の保育観の構成を比較してみると、小原ら（2013）は保育環境や保護者・保育者間の信頼関係・連携に関する保育観についても言及しており、子どもを中心とした保育実践のみならず、保育全般を網羅した保育観を捉えて構成概念を析出していると言えよう。

これらのことから、小原ら（2013）の保育観に関する構成概念を軸に先行研究の整理を行うことにより、保育全般を網羅した保育観を捉え、本研究の目的である保育経験による保育観の相違点の導出が可能になると考える。次項から、小原ら（2013）のカテゴリーを軸に先行研究から保育観の抽出、及び内容の整理を行う。

## 2 子どもへの理解に関する保育観

小原ら（2013）は、子どもへの理解に関する保育観を「気持ちへの寄り添い」と「幼児理解」の2つに分けて詳細に検討している。まず、「気持ちへの寄り添い」については、保育士が幼稚園教諭より有意に重視していることを明らかにした<sup>(17)</sup>。その背景には、『保育所保育指針』の示す生命の保持及び情緒の安定を図ることへの保育士の高い意識が存在すると推察され、幼稚園教諭との保育観の違いを生む要因になったと考える。一方、子ども一人ひとりへの理解や援助など「幼児理解」に関する保育観には保育経験による違いは見られなかったとしている。小原ら（2013）が示す子どもへの理解の内、「幼児理解」を個の尊重を意味すると捉えると、同様の結果を示している研究が3編見られた。梶田ら（1985）は、「まとまり重視—個性尊重」の保育観について、幼稚園・保育所の保育施設ごとの保育観に大きな違いや偏りが認められないことを明らかにしている<sup>(18)</sup>。中（1996）も、集団指向または個人指向のいずれの保育観をもつかは保育施設による差異は見られず、どちらも一人ひとりのペースを理解して尊重する援助をしていることを明らかにした<sup>(19)</sup>。気になる子どもへの理解や集団での姿の捉え方にも保育経験による保育観に著しい違いは見られないという研究結果（守ら，2013）<sup>(20)</sup>も示されており、個を尊重するという子どもへの理解に関する保育観には、保育施設による保育経験に関わらず概ね同様の保育観をもつことが示唆された。

## 3 発達の諸側面に関する保育観

小原ら（2013）は、発達の諸側面に関する保育観を「子どもの主体性」「子どもの自己肯定感」「対人関係」「規範意識」に分けて詳細に検討し、「子どもの主体性」「対人関係」において幼稚園教諭が保育士より有意に重視している

ことを明らかにした<sup>(21)</sup>。保護者の就労等の理由で保育を必要とする子どもが在籍する保育所では養護的側面への援助を多く求められる一方で、幼稚園では教育的側面への援助を重点的に行えることが、このような有意差を生む背景になっているのではないかと考える。

保育経験の違いが「子どもの主体性」に関する保育観の相違につながる要因として大元（2020）は、2008（平成20）年版の『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』における「主体性」の位置付けに違いがあると指摘している。『幼稚園教育要領』においては「主体性」を教師が計画した教育目標に向けて子どもが自発的に活動する主体的活動として位置付けられていることを、『保育所保育指針』においては『幼稚園教育要領』における「主体性」の位置付けに加えて、子どもが主体的活動をしていく要件として養護を位置付けていることを指摘し、その相違に言及している。これらから形成される保育観として、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識し、就学までにどのような育ちを形成するかという前方視的な幼稚園特有の保育観と、子どもの主体性を支える養護を重視し、子どもの今に目を向け発達や思いを大切にすることが将来の育ちにつながるとした保育所特有の保育観に相違を見出している<sup>(22)</sup>。2017（平成29）年の『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の改訂では、育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が共通に掲げられ、どの保育施設においても3歳以上児の教育における主体性の位置付けはかつての『幼稚園教育要領』と同等に位置付けられたと考えるが、このような変化が各保育施設の保育観に影響を与え、保育施設の違いを越えた共通の保育観に繋がっているかどうかについては検討の余地があると言えよう。

小原ら（2013）は発達の諸側面を詳細に分析し、思いやりや人との関わりなどの「対人関係」に関する保育観には保育経験による違いが見られたとしているが、異なる結果も示されている。中（1996）は、「対人関係」として子どもの喧嘩を挙げ、子どもに解決を任せつつ必要によっては仲裁しようとする保育観や、自分の気持ちや要求を素直に表現できるよう指導する保育観は、保育施設の違いによらず共通していることを指摘している<sup>(23)</sup>。これらのことより、「対人関係」に関する保育観については、保育経験による保育観に異なる部分と共通する部分とが存在する可能性が考えられ、踏み込んだ検討が課題と言えよう。

#### 4 保育環境に関する保育観

小原ら（2013）は、保育環境に関する保育観を「子どもの発達を促す環境」「安心できる環境」「保育者自身の表情や行動見本」「保育者自身の保育を楽しむ姿勢」に分けて詳細に検討し、保育士が「安心できる環境」を幼稚園教諭より有意に重視していることを明らかにした<sup>(24)</sup>。その背景には、幼稚園と比べ1日の在園時間が長く3歳未満児も在籍する保育所では、情緒の安定を図りながら過ごせる家庭的な雰囲気求められることにあると推察する。

小原ら（2013）は、「子どもの発達を促す環境」については子どもが活動し



やすい保育内容や計画等から、「安心できる環境」については子どもの健康面や食事面からと、保育環境ごとの保育観を詳細に分析している<sup>(25)</sup>。その他の保育環境を取り上げ保育観を検討した研究として、運動遊びの場面と食事場面における保育観に関する先行研究が見られた。

舘林・宮沢（2015）は運動指導観を運動遊びでの指導に対する見方・考え方として定義し、幼稚園や保育所では、朝の自由遊びの時間の運動遊びとしての運動や保育者が教材として用意した楽しい活動を経験し運動能力の発達を促す運動（援助的運動指導観）、目的を達成するための運動（計画的運動指導観）といった運動への考え方（運動指導観）を示している。幼稚園・保育所・認定こども園の保育者を対象とした調査を行い、運動遊びを行う保育者の運動指導観は、保育者のもつ保育観と相関関係にあるとしている<sup>(26)</sup>。運動指導や通常の遊びの指導においては、体力や動作といった運動能力の獲得よりも子どもの意欲や楽しい経験を重視する運動指導観が見出されている。しかしながら、異なる保育施設での保育経験に基づく指導観の比較は行われておらず、保育経験による保育者の運動遊びに関する保育観の異同は確認されていない。中井・川下（2002）は公立・私立園の幼稚園教諭を対象とし、運動遊びといった実際の保育場面での指導信念について調査したところ、幼稚園教諭間でかなり共通していることを明らかにした<sup>(27)</sup>。ただし、運動遊びに関する指導観を保育士対象に調査した研究は見られないことから、保育経験による保育観の異同は確認されていない。

伊藤（2011）は食事指導に関して、幼稚園と保育所の理念や体制の違いによって、保育者の食事場面に対する捉え方や子どもの食行動に対する考え方に違いがあると指摘している。幼稚園では6割、保育所では10割の園が給食を提供しながら食事指導を行う中で、幼稚園教諭は「自分で食べる」「あいさつをする」等の指導を重視する一方、保育士は「適切な食事量を知る」「食材について知る」等を重視して指導する傾向が見られたことを明らかにしている<sup>(28)</sup>。また、食事指導に関して幼稚園教諭は家庭を中心に、保育士は保育所でも教えるべきといった指導観の違いも認められ、田中ら（2013）<sup>(29)</sup>も同様の結果を見出している。給食提供の有無による差が、このような食事指導に関する保育観の違いを生む要因になっていると考える。また、栄養バランスを意識し「嫌いなものでも食べる」ことができるような指導に関する保育観は幼稚園・保育所とも同じ傾向であるという結果（伊藤，2011）<sup>(30)</sup>と、多少保育士が重視する傾向が強いものの、ほぼ同じ傾向である結果（中，1996）<sup>(31)</sup>とが見られ、食事指導に関する保育観においては、保育経験に関わらず概して同傾向の保育観もあることが伺われた。

保育環境としては、表現遊び、絵画造形遊び、集団遊び等といった保育内容の違いが異なる保育環境を生起させると共に、自由遊び、クラス活動、振り返り活動、園行事等の保育場面も異なる保育環境につながる事が予想される。このような多様な保育環境を取り上げ、保育経験の違いと保育観とを比較検討することも意義あることと考える。

## 5 信頼関係・連携に関する保育観

小原ら（2013）は、信頼関係・連携に関する保育観を「子どもとの信頼関係」「家庭との連携」「保育者間の連携」に分けて詳細に検討し、「子どもとの信頼関係」「家庭との連携」において保育士が幼稚園教諭より有意に重視することを明らかにした<sup>(32)</sup>。時間差勤務による当番保育体制をとることの多い保育所では、自分の担当するクラスの子どもだけでなく、様々な年齢やクラスの子どもを保育する場面があり、より多くの子どもたちとの信頼関係を築く必要性を感じていることが、「子どもとの信頼関係」を重視した保育観が生まれる要因となっていると考える。また、幼稚園と比べ保育所においては、保育者の時間差勤務や当番保育体制のため保護者と日々かかわることができない状況や限られた機会の中で保護者とのコミュニケーションを図ろうとすることが背景にあると考える。

小原ら（2013）は保育者間の情報交換や共通理解などを意識した「保育者間の連携」に関する保育観に保育経験による違いは見られないとした。上田（2003）は、幼稚園教諭よりも保育士の方が保育への熱意や向上心、保育計画の立案や援助の仕方の違い等、保育士自身の価値観の相違から生まれる職員間の意識統一や連携の難しさを有意に強く感じていることを明らかにしている<sup>(33)</sup>。保育者集団の規模が大きく、職員数が多い上に時間差勤務等がある保育所においては、職員間の意識統一や連携の困難さが伺われる。また、幼稚園から認定こども園に移行した園の保育者が「人間関係の複雑化」「考え方の違い」に困難さを感じ、「同僚との関わり」を重視する意識が高まるとの指摘もある（矢藤ら，2017）<sup>(34)</sup>。以上を踏まえると、保育士の方が保育者間の連携を重視する保育観をもつ傾向にあり、認定こども園に移行した場合は幼稚園教諭の経験をもつ保育教諭が保育士の経験をもつ保育教諭の保育観に合わせようとする意識が働くのではないかと考えられる。「保育者間の連携」に関する保育観の共有は、保育教諭としての円滑な協働には不可欠であると考えるが、実際には十分に共有されていない可能性もあり得る。保育経験の違いを考慮した、より詳細な検討が必要な保育観であると言えよう。

## 6 異なる保育施設での保育経験によって形成される保育観の異同

幼稚園教諭・保育士としての保育経験の違いに着目し、保育観の異同について先行研究を概観した結果、次のことが明らかになった。

第1に、保育観を観点ごとに分類して比較する中で、異なる保育施設での保育経験の違いに関わらず共通の保育観と、保育経験の違いが要因となった異なる保育観があることが明らかになった。幼稚園教諭・保育士が共通にもつ保育観としては、「子どもへの理解」に関する「個人指向」の保育観、「対人関係」における人との関わりに関する保育観、運動遊びに関する指導観、栄養バランスを意識した食事指導に関する保育観であった。異なる保育経験をもつ保育教諭が共通の保育観をもって保育に臨んだ場合、円滑な協働が見込めるであろう。一方、「気持ちの寄り添い」「安心できる環境」「子どもとの信頼関係」「家庭との連携」等、養護的側面に着目した保育観においては保育士の方が、

「子どもの主体性」「対人関係」等、教育的側面に着目した保育観においては幼稚園教諭の方がそれぞれ重視する傾向が示され、保育経験による保育観の違いが見て取れた。このような保育観の相違は、様々な保育経験をもった保育教諭が認定こども園という場で協働するにあたって、保育観の共有に困難が予想され、円滑な協働に支障を来たす可能性を否定できない。

第2に、保育経験による保育観の異同が十分に比較検討されていない現状が明らかになった。運動遊びの指導信念に関する研究のように幼稚園教諭または保育士のいずれかに焦点が当てられていたり、「対人関係」「保育者間の連携」に関する保育観のように複数の先行研究を擦り合わせて見ると保育経験の違いを直接比較している研究が希少であったりすることが明らかになった。また、保育全般に関する保育観は多く取り上げられていたが、保育内容や保育場面ごとの保育経験による保育観を比較した研究もあまり行われていないことが明らかになった。保育内容や保育場面ごとに細分化して保育経験の違いを踏まえた保育観の異同を明らかにしていくことによって、保育教諭がより円滑な協働を行う上での重要な手がかりが得られると考える。

第3に、保育教諭としての独自の保育観についてはほとんど検討されていないことが判明した。認定こども園への異動により、幼稚園での保育経験をもつ保育教諭は養護を、保育所での保育経験をもつ保育教諭は教育や主体性を意識するようになったことが指摘されている(矢藤ら, 2017)<sup>(35)</sup>が、保育教諭としての独自の保育観の特徴や形成過程については未検討であることも分かった。改めて、保育教諭独自の保育観の実態を捉える研究の不足も見出された。

#### IV 今後の研究の方向性と課題

白井・林(2015)は「保育観」の概念として何を大事に保育するかを認識し仲間でも共有することが大事であるという概念、すなわち「保育観の共有」が保育の質の向上につながるとしている<sup>(36)</sup>。認定こども園においても保育の質の向上を目指し、保育教諭が保育観を共有しながら円滑に協働する必要がある。しかしながら、認定こども園に勤務する保育教諭はそれ以前に幼稚園や保育所など設置目的の異なる施設で勤務した経験をもっていることが多く、保育観の違いがあることを想定し、その調整が必要であると考えた。そのため本論では、認定こども園への勤務以前の保育経験による保育観の相違の有無とその実際を先行研究より明らかにすると共に、保育教諭としての円滑な協働に向けての課題の明確化を目指して先行研究の整理を行った。しかしながら、保育教諭として協働するに際して、それ以前の保育経験がどのような影響を及ぼすかについての一致した見解は得られていないことが明らかになった。

以上のことから、今後は保育教諭として勤務するに際しての保育観の特徴や保育教諭として勤務する以前の保育経験による保育観の相違の直接的な比較、相違が生まれやすい保育場面や内容の明確化を推進することが課題である。拡充が進む認定こども園の保育の質の向上に欠かせない研究であると考えられる。また、調査対象者については、幼稚園教諭または保育士としての保育経験

をもつ保育教諭に加えて、認定こども園に限った保育経験をもつ保育教諭を対象とすることによって、保育教諭の保育観の独自性を明らかにすることにつながるのではないかと考える。

保育経験の違いを踏まえた保育教諭の保育観の特徴を見出すことは、認定こども園において様々な保育経験をもった保育者が円滑に協働するための有用な手がかりとなり、保育の質の向上に寄与することが期待できる。

## 引用文献

- (1) 内閣府, 2021, 「認定こども園に関する状況について (2021 (令和3) 年4月1日現在)」, pp. 1-2,  
[https://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/kodomoen\\_jokyo.pdf](https://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/kodomoen_jokyo.pdf)  
(2021 (令和3) 年11月5日閲覧)
- (2) 松本佳代子, 2019, 「保育者の保育観に関する研究動向」『共立女子大学家政学部紀要 第65号』, p. 152
- (3) 藤木大介, 上田七生, 樟本千里, 若林紀乃, 越中康治, 松井剛太, 長尾史英, 山崎晃, 2011, 「認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響」『梅光学院大学論集』(44), pp. 12-19
- (4) 藤木ら, 前掲書3, pp. 12-19
- (5) 西川ひろ子, 2013, 「広島県における認定こども園の設置動機・教職員及び保護者の意識の変化と課題」『安田女子大学紀要 (41)』, pp. 227-233
- (6) 内閣府, 文部科学省・厚生労働省, 2018, 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』, フレーベル館, pp. 2-3
- (7) 中井隆司, 松良綾子, 2005, 「保育場面に表出する「幼稚園教諭の指導信念」に関する事例研究」『教育実践総合センター研究紀要 (14)』, p. 16
- (8) 山本佳子, 2017, 「保育者論が学生の保育観にどのような変化をもたらしたか」『中国学園紀要』(16), p. 207
- (9) 松本, 前掲書2, p. 143
- (10) 松本, 前掲書2, pp. 144-149
- (11) 浅井かおり, 浅井拓久也, 2017, 「保育士の保育観形成過程についての一考察—TEM 図の分析を通じて—」『みらいの保育と教育—東京未来大学保育・教職センター紀要』, 特別号, pp. 1-2
- (12) 梶田正巳, 後藤宗理, 吉田直子, 1985, 「保育者の「個人レベルの指導論 (PTT)」の研究」『名古屋大学教育学部紀要教育心理学科 (32)』, pp. 173-187
- (13) 中俊博, 1996, 「保育者の保育観—幼稚園と保育所の比較から見た—」『和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』No. 6, pp. 129-141
- (14) 藤木ら, 前掲書3, pp. 12-19
- (15) 矢藤誠慈郎, 森俊之, 野田美樹, 鈴木智子, 青井夕貴, 森美利花, 石川昭義, 大倉健太郎, 西村重稀, 舘直宏, 2017, 「認定こども園化に伴う保

- 育者の専門性のあり方の変化に関する研究」『保育科学研究』第8巻，  
pp. 24-44
- (16) 小原敏郎，入江礼子他，2013，「保育者の保育観に関する研究—保育経  
験年数，保育所・幼稚園の違いに着目して—」『保育士養成研究』第31  
号，pp. 58-59
- (17) 小原ら，前掲書16，pp. 58-65
- (18) 梶田ら，前掲書12，pp. 173-187
- (19) 中，前掲書13，pp. 129-141
- (20) 守巧，山崎摂史，駒井美智子，2013，「保育現場における「気になる」  
姿への傾向分析」『東京福祉大学・大学院紀要』第4巻第1号，pp. 63-65
- (21) 小原ら，前掲書16，pp. 58-65
- (22) 大元千種，2020，「幼児教育・保育における子どもの主体性についての  
考察」『別府大学短期大学部紀要』第39号，pp. 44-48
- (23) 中，前掲書13，pp. 129-141
- (24) 小原ら，前掲書16，pp. 58-65
- (25) 小原ら，前掲書16，pp. 58-65
- (26) 館林拓磨，宮沢秀次，2015，「保育士・幼稚園教諭の保育観と運動指導  
観」『教育保育研究紀要』第1号，pp. 19-26
- (27) 中井隆司，川下亜紀，2002，「幼稚園教諭の運動遊びに対する「個人レ  
ベルの指導論」に関する研究」『奈良教育大学附属教育実践総合センター研  
究紀要(11)』，pp. 129-137
- (28) 伊藤優，2011，「幼稚園・保育所の食事指導における保育者の意識につ  
いての検討—幼稚園と保育所の比較—」『中国四国教育学会教育学研究紀  
要』第57巻，pp. 569-574
- (29) 田中浩二，大塚良一，福山多江子，田中利則，中川浩一，肥塚新一，  
2013，「保育所の保育者と保護者の保育観に関する意識の比較—保育所と保  
護者に対する意識調査の結果から—」『東京成徳短期大学紀要』第46号，  
pp. 15-18
- (30) 伊藤，前掲書28，pp. 569-574
- (31) 中，前掲書13，pp. 129-141
- (32) 小原ら，前掲書16，pp. 58-65
- (33) 上田淑子，2003，「保育者の力量観の研究—幼稚園と保育所の保育者の  
比較検討から—」『保育学研究』第41巻第2号，p. 30
- (34) 矢藤ら，前掲書15，pp. 24-44
- (35) 矢藤ら，前掲書15，pp. 24-44
- (36) 白井はる奈，林悠子，2015，「対人援助者に求められる援助観：乳児保  
育における熟練保育士の語りを通して」『社会福祉学部論集』11，pp. 26-  
27

---

Research Trends and Issues Concerning Childcare Teachers' Views on Childcare  
With a Focus on Differences in Childcare Experiences as Kindergarten Teachers and Nursery  
Teachers

HASUI Kazuya\*1   NAKAHIRA Ayako\*1   TAKAHASHI Toshiyuki\*2   KATAYAMA Mika\*2

After the revision of the Act on Child Education and Childcare Support, certified centers for early childhood education and care are increasing significantly, result in more cases of childcare teachers with various childcare experiences (kindergarten teachers and nursery teachers) working at the same center. With a focus on the differences in childcare experience among childcare teachers, this study discussed the research trends and issues concerning the views on childcare. An overview of previous researches categorized by content suggests that kindergarten teachers tend to emphasize educational elements and nursery teachers tend to emphasize nurturing elements in their views on childcare, whereas it became clear that there has not been sufficient study of what content and situations in different childcare experiences lead to differences in views on childcare. Since the sharing of views on childcare leads to the improvement of the quality of childcare, the aim of further studies is to clarify more detailed differences in the views of childcare teachers based on their childcare experience.

Keywords :certified center for early childhood education and care, childcare teacher, view on childcare, difference, childcare experience

\*1. Kojo Certified Center for Early childhood Education and Care, Okayama City

\*2 Graduate School of Education, Okayama University

---